

広島大学平和センター CPHU NEWSLETTER 2022

〒730-0053 広島市中区東千田町 1-1-89

TEL: 082-542-6975 FAX: 082-245-0585

E-mail: heiwa@hiroshima-u.ac.jp

Website: <https://heiwa.hiroshima-u.ac.jp>

(2020 年 9 月よりホームページ URL を変更しました)



ご挨拶

今、あらためて「平和」とは何かを考える

広島大学平和センター長

川野 徳幸

(写真は、2022 年 5 月 19 日共同通信社広島支局撮影)



2022 年 2 月 24 日、ロシアのウクライナへの軍事侵攻が始まりました。当初、短期間でウクライナは制圧され、この一方的な戦争は終結するであろうと予測する専門家もいましたが、現在もその悲劇は継続しています。東南部を中心に戦闘は激化し、ドンバス地方の大部分が制圧されました。さらに、国連によると 770 万人を超える人たちが国外へ避難しています。一体、今後どれだけの人が国内外に避難するのでしょうか。

この軍事侵攻に対し、国連はじめ国際社会は次々と非難の声明を出し、アメリカ、EU 諸国は武器の供与、人道支援をはじめました。日本政府も同様に非難の意志を表示し、防衛装備品の供与を行いました。平和を希求する広島大学も抗議のメッセージを出しました。

(2 月 25 日 <https://www.hiroshima-u.ac.jp/news/69486>)
弊センターも同日に強い抗議のメッセージを発信しました。

(https://heiwa.hiroshima-u.ac.jp/01_Message.htm)

これまで、キーウ（キエフ）をフィールドに、チェルノブイリ原発事故被災者の心的・社会的影響を調査研究してきました。原発で働く人たちが居住したプリピャチ市からキーウ市に避難した住民への聞き取り調査がそれです。この聞き取り調査は、プリピャチ市避難住民の互助団体である「ゼムリャキ」という組織の全面的協力を得て実施してきましたが、彼らとは軍事侵攻以降、何度か連絡を取りました。同団体代表のタマーラ・クラシツカさんは、ルーマニアからハンガリー、チェコを経て、現在は、ドイツ・ハンブルクに避難しています。強い憤りと悲しみに満ちたメールをいただきました。最後に、必ずウクライナに帰国するとも書かれてありました。

今回のロシアのウクライナへの軍事侵攻は、三つの新たな分岐点を私たちに再認識させました。一つは核兵器に対する

考え方です。核兵器の脅威に対し、「核抑止」に依存するのがあるいは「核なき世界」を目指す核兵器禁止条約のような国際社会の規範をもとめるのかという分岐点です。二つ目は、原発の是非についての分岐点です。自国のエネルギーは原子力でも賄う必要があるとする考えと今般のザポリージャ原発のように、制圧され危険に晒されるという脅威をどのように考えるのか。三つ目は、国際協調主義に対する考え方です。外交による国際協調主義を模索した国際社会が武力・力による社会へ回帰するのはいかなかという分岐点です。これらの議論は、2022 年 3 月 15 日付『中国新聞』紙面にて報告しました。閲覧ください。

(<https://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=117487>)

先の見通しなどわかりませんが、私たちは今できる最善のことをやるしかありません。平和を希求する広島大学の教育研究の中核を担う平和センターとして、この問題について積極的に発信したいと思っています。国際法にも違反する今般のロシア軍のウクライナへの軍事侵攻を蛮行として非難することは容易いですが、あらためて「唯一の戦争被爆国」、そして原爆被爆被害を経験した「ヒロシマ」・「ナガサキ」は、何を発信し、どう対峙していくのか、試されているようにも思えます。原爆を体験した被爆地、そして先の大戦を経験したこの国は、国連を中心に構築してきた国際協調主義を堅持し、まずは一日も早い停戦にあらゆる努力を払うべきです。戦争・紛争で犠牲になるのは無辜の市民です。そのことを頑なにこの国、そして、被爆地は発信していかなくてはなりません。今こそ、「ヒロシマ」は、そして被爆地に誕生し、立脚する広島大学は、人道支援を主軸に据え、戦争による犠牲者は誰であるのか、そしてどういった被害を生むのかということを学術的な視点から積極的に発信し、世論を動かす原動

力の一つになるべきです。

1950年代後半から60年代前半に誕生したとされる平和学は、「平和」の定義を探求し続け、「戦争の不在」から「暴力の不在」へとその定義を発展・深化させてきました。それに伴い、平和学の主たる研究対象領域も戦争から開発、そして人権・人間の安全保障、平和構築などへと研究対象のすそ野を広げてきました。しかしながら、今般の軍事侵攻を受けて、また平和学誕生当時の領域が主流となるのかもしれませんが。平和学における構造的暴力・文化的暴力の概念の誕生・創造は、二分法的に対比する平和観（戦争と平和）、つまりゼロサム的な平和観を克服するという試みでもありました。他方、「平和」とは「暴力」の不在であるという新たな平和概念は「理想」に過ぎるという考え方もあります。

私たちは「理想」と「現実」のはざまに生きています。たとえば、核兵器禁止条約です。これに関しては、すでにメディア、雑誌、紀要等々で発言していますので、ここで繰り返しません。多くが「核なき世界」を支持しながら、同時に、「核抑止」は機能すると思え、「核の傘」にある日本政府の立場を許容、あるいは諦観している実態があります（たとえば、2021年1月23日付『中国新聞』<https://www.hiroshimapeacemedia.jp/blog/?p=103168>、『創大平和研究』36号など参照ください）。核兵器に関して言えば、「核なき世界」が「理想」で、「核の傘」が「現実」と捉えることができるでしょう。今般のロシアのウクライナへの軍事侵攻は、この「理想」と「現実」に大きな影響を与えるのかもしれませんが。学生の平和観については、現在、読売新聞と弊センターファンデルドゥース先生と共同調査研究を進めています。この調査研究は、2020年より始めましたが、中間報告として『広島平和科学』に論考をまとめているので、あわせて閲覧いただければ幸いです。そこでもやはり、この「理想」と「現実」の実態が浮き彫りになりました。「理想」のない社会に未来はあるのでしょうか。ユートピア的な社会を語ることは、現実的でないという批判はあるでしょう。それであれば、何故、私たちは、例えば、SDGsなる理想を掲げ、「誰一人取り残さない」世界の実現をめざそうとするのでしょうか。市民社会の英知の集結であろう核兵器禁止条約は何故、国連で採択され、発効されたのでしょうか。現実的でないとして、それらを論じることは容易い。しかしながら、「理想」のない、「理想」を語らない社会を次世代に残していいのでしょうか。その「理想」のため、私たちは研究者・ジャーナリスト・市民活動家らと協働で、2022年6月21～23日に開催された核兵器禁止条約第1回締約国会議に「核

兵器禁止条約第6・7条に関する日本の市民社会からの提言書」を提出しました。詳しくは、次のURLを参照ください。
https://heiwa.hiroshima-u.ac.jp/TPNW1MSPJpCSRRecommendations_JPN.pdf

これまで数多の戦争・紛争に対して、相対的に「対岸の火事」として捉えてきたこの日本でも防衛施設庁の定義による武器の供与に始まり、防衛費の増大の議論も始まっています。あの敗戦を基盤にしたこの国の「平和」はこれからどこに向かっていくのでしょうか。私たちは今まさに激動の時代であり、大きな分岐点に立っている気がします。コロナというパンデミックを経験し、そして、ロシアのウクライナへの軍事侵攻の様子を連日目の当たりにしています。今こそ、「平和」とは何か、をあらためて考える時なのだろうと思います。

今年度は、センター長としての三期目の最後の年です。「まとめの一年」として位置づけ、これまで平和センターが取り組んできた諸活動を深化させ、さらに「平和」とは何かを考える一年としたいと思います。そのために、「平和」とは何かをあらためて考える「場」を積極的に提供していきたいと思っています。

弊センターは、専任教員3名、特命教授1名、教育研究補助職員2名、RA2名、契約職員1名という小さな所帯ですが、職員一丸となって、教育・研究・社会貢献に邁進したいと思っています。運営委員の先生方、客員・兼任研究員の先生方、そして、弊センターの諸活動にいつもご理解・ご協力をいただいている関係各位におかれましては、引き続きご指導ご鞭撻、そしてご支援のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

(2022年6月27日 記す)

2021年度のセンターの活動

広島大学平和企画「芸術から平和を想う」

●第一部平和センター講演会

「76年前と1021年前のあいだで

ー非常事態で働き場所を得た女性たちのその後ー」

2021年8月6日 東千田未来創生センター401・402とウェビナーで開催（会場とオンラインで約70名参加）

<講演者>

片渕須直（アニメーション映画監督・代表作「この世界の片隅に」/「この世界の（さらにいくつもの）片隅に」等）

<企画>

ファンデルドゥース・ルリ（広島大学平和センター准教授）



片瀬監督講演の様子

公開講座

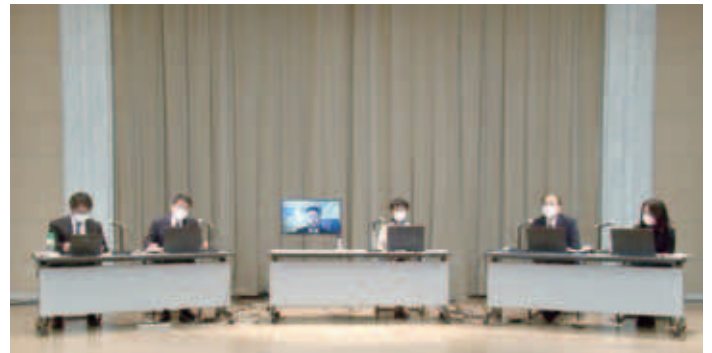
- 映画『太陽の子』上映&トークイベント
ー社会のなかの科学者・研究者と科学技術ー
日本バグウォッシュ会議、広島大学総合科学部共催
イオンエンターテイメント株式会社協力
2021年12月11日 広島国際会議場ヒマワリで開催
(約80名参加)
<司会> 衣笠梨代 (テレビ新広島 アナウンサー)
<パネリスト>
黒崎 博 (『太陽の子』監督・脚本)
浜野 高宏 (NHK エンタープライズ シニアプロデューサー)
中尾 麻伊香 (広島大学総合科学部 准教授)
友次 晋介 (広島大学平和センター 准教授)
稲垣 知宏 (日本バグウォッシュ会議 代表、広島大学
総合科学部 教授)
<モデレーター>
川野 徳幸 (広島大学平和センターセンター長)
<企画> 匹田 篤 (広島大学総合科学部 准教授)



パネルトークの様子

市民公開講座

- 広島大学平和センター主催広島平和記念資料館共催
令和3年度市民公開講座 オンラインイベント
「【被爆と心】を考える」
広島平和記念資料館と共催 2022年2月20日ウェビナー (Zoom) での開催 (オンラインでの参加者約130名)
<講演者>
川野徳幸 (広島大学平和センターセンター長・教授)
井上 顕 (高知大学保健管理センター 所長/教授)
ファンデルドゥース・ルリ (広島大学平和センター准教授)
滝川卓男 (広島平和記念資料館館長)
<コメンテーター>
片柳真理 (広島大学大学院人間社会科学研究科 教授)
<総合司会> 友次晋介 (広島大学平和センター准教授)
<企画>
ファンデルドゥース・ルリ (広島大学平和センター准教授)



総合討論の様子

研究会

- 第231回研究会 (2021年6月29日)
オンラインセミナー (40名参加)
井上 顕 (高知大学保健管理センター 所長/教授)
「医学・社会学・教育学分野からみた支えあう社会づくりの重要性: コロナ禍の現状もふまえて」
●第232回研究会 (2021年7月6日)
オンラインセミナー (28名参加)
城下英行 (関西大学社会安全学部 准教授)
「防災の学びとは何か: 近年の災害事例を踏まえて」
●第233回研究会 (2021年7月30日)
オンラインセミナー (37名参加)

山田義裕（北海道大学大学院メディア・コミュニケーション
研究院、国際広報メディア・観光学院 教授）

「モビリティーズの時代における平和と自由」

●第 234 回研究会（2021 年 10 月 21 日）

広島大学東広島キャンパスでの開催（22 名参加）

黒木英充（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
/北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 教授（併任））

「世界をつなげるレバノン・シリア難民」



黒木教授講演の様子

●第 235 回研究会（2022 年 1 月 14 日）

オンラインセミナー（25 名参加）

黒崎輝（福島大学行政政策学類 教授）

「拡大核抑止をめぐる日本の国内政治の変容とその政策的
含意」

センター共催・後援・協力等のシンポジウム、研究会等

●2021 年 5 月 30 日（協力）オンラインライブ配信

広島市主催 平和文化セミナー

「わかるとかわる！核兵器禁止条約」

●2022 年 1 月 30 日、2 月 19 日（共催）オンライン開催

広島大学大学院人間社会科学研究科設立記念セミナー

「在外被爆者を含んだ被爆体験とその継承

—豊永恵三郎さんの運動—」

●2022 年 3 月 14 日（共催）

領域横断ワークショップ

「平和研究と環境研究の接続のありかを問い直す」

北海道大学高等教育推進機構 講義室で開催

出版物

●『広島平和科学』（第 43 号、2022 年 3 月）

社会貢献など

●新聞、TV 等メディアでの発信 多数

●政治社会学会理事、Editorial Board Member of

RADIATION MEDICINE, ECOLOGY AND

REHABILITOLOGY、「エジプト日本科学技術大学

（E-JUST）プロジェクトフェーズ 3」 国内支援委員会専門部会国際ビジネス・人文学ワーキング・グループ委員、ひろしま平和研究・教育機関ネットワーク委員（広島県）、平和宣言に関する懇談会委員（広島市）、公益財団法人広島平和文化センター理事、平和に係る教育・研究の導入機能等に関する検討会（旧理学部 1 号館）委員（広島市）、読売新聞被爆 76 年被爆者意識調査（共同事業）、NGO ヒロシマ・セミパラチンスク・プロジェクト顧問、国立研究法人日本原子力研究開発機構 核不拡散政策研究委員会委員、国立研究法人日本原子力研究開発機構 将来の原子力技術に係る社会環境整備検討委員会委員、広島市ピースツーリズム推進懇談会委員、広島平和文化センター広島平和記念資料館運営会議委員、国際博物館会議日本委員会委員、公共に対する犯罪犠牲者追悼のための記念博物館国際委員会委員など

日本学術振興会科学研究費助成事業

●研究代表者：川野徳幸

2019-2022 年度科学研究費助成事業 基盤研究（B）

『世界の核被害の地域間比較研究：「いのち」、「こころ」、
「くらし」の視点から』

補助金額：1,260 万円（2019-2022 年度直接経費総額）

*その他、分担 4 件

●研究代表者：友次晋介

2019-2021 年度科学研究費助成事業 基盤研究（C）

『科学技術外交としての日本の対アジア地域原子力協力』

補助金額：320 万円（2019-2021 年度直接経費総額）

*その他、分担 4 件

●研究代表者：ファンデルドゥース・ルリ

2021-2025 年度科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））

“Establishing Memory Studies in Japan: A Cornerstone for Peace”

補助金額：1,130 万円（2021-2025 年度直接経費総額）

*その他、分担 2 件